

## 国際協力特別賞

共に歩み続ける

目黒区立第十中学校 2年

村田 主喜

悔しい。僕は悔しい。鉛筆を持つチャンスすらないシリアの友だちたち。

今年の春休みに僕はヨルダンの首都アンマンに行った。ヨルダンにはシリアから避難してきた人が 65 万人いて、その 8 割以上の人々がキャンプではなくホストコミュニティで生活している。その中の数件の家庭を訪問させてもらった。11 歳のカーセム君は両親と 5 人の兄弟と暮らしている。急な階段を下へ下へと降りた先にある家。薄暗い家と同じくらい家族の表情は沈んでいて動かない。生活がとても厳しくて食事が出来ない日もあると言う。僕は 1 歳の時から写真家の母と、2011 年の紛争が始まる直前まで毎年シリアに行っていた。シリアの人たちは皆とても温かく、思いやり深く、親切で笑顔にあふれていて明るい。家に行くとお茶や食事や惜しみなく様々なおもてなしをしてくれ、心も身体も温まる。でも、ここに居るのは同じシリアの人たちなのだろうか。僕は驚き戸惑ってしまった。彼らを変えた原因は争い。争いが何を奪ってしまったのか、何を奪ってしまったのか、僕はそれを目の前にして言葉がなかった。

カーセム君は学校に行っていない。働けるのは彼だけなので、朝から夜まで一日中働いている。でも手に出来るのは一日 370 円ほど。物価の高いアンマンでは、あまりにも少なく生活は厳しい。ヨルダンにいる約 4 割の子どもたちが学校に行けていない。シリアの未来を作るのは子供たち。教育は希望。教育はワクチン。教育はそんな子どもたちが自らを思考し、自らの手で未来を作る基礎となるものだ。それには多くの人々の助けが必要だ。でも上から見るのではなく、しゃがんで同じ目線で見なければ駄目だ。今何が必要なのか、何が良くて何が悪いのかを同じ場所に居て考え感じる事が大切なのだと思う。机に向かっては判らないことがある。目を見つめ、話をして、握手をする事で伝わるものの中に本当に大切な物がある。だから、共に居ようとする思いは大切だ。しかし、カーセム君との時間の中で「WALKING TOGETHER」、共に歩み続ける事がもっと大切なのだと知った。「SDGs」のグローバル目標は僕たちの未来をどう描くかという問題だ。今、僕に出来る事は一人でも多くの人に伝える事。同時にシリアの人々に絶対忘れないと伝え続ける事だ。

ほんのわずかな時間だけどカーセム君とサッカーをした。シリアではよく遊んでいたそう。僕よりずっと上手い。その時、初めて笑ってくれた。ずっと厚い黒雲が覆ったように

無表情だった彼が笑ってくれた。一緒にボールを追いかけて、一緒にパスし合って、息を切らせて。でもその後、彼はすぐに仕事へ行ってしまった。僕はその背中に叫んだ。「また一緒に同じボールを追いかけよう。」アンマンの青い空。シリアへと続く同じ空。共に歩み続けようとするこの思いを希望に繋げたい。